

見て覺めたりしが忽ち精神元に復して
常より快く成りたればかくい床をさ
へ離れたるなりと言ふ虎吉は此と聞て
思はず前裁に飛下り遂に氷川神社の方
に向ひ冥助報謝の新禱を疑しやがて多
仲に打向ひ七夜參詣の事より昨夜の始
末と詳に告げし多仲の之を聞て神明
の加護と虎吉の忠實を甚く感じ先嗽口
手水して禮服に改め氷川神社の方を遙
拜して神恩の忝なさで謝し次に虎吉
に向ひて忠なる志を賞し是より虎吉
の名を宇治の姓に因みて茶吉と呼換（



事の政治とのと案じ暮し物憂さ光陰を送りたりぬ（記者因に云氷川明神殿の事克唐君を
筆々に足らざるに似たれど當時此事ありと言傳るを以て姑く爰に之存す取捨の看官の裁量
に任す）

○ 第九回

當代の東家にを裏立やうける此で多仲の病氣本
復の癒けと爲して腹に腹と告げ又西御殿にも出
明して後室に腹を告げ奥老御左衛門に若殿の御
身を深く托し且花里結城等々奸計を防ぐべき事
何吳と打語ひ互に慷慨悲憤の涙に咽ひやがて其
翌日國許さして立出けり此で多くの日を經て本
國岸和田に若し桑山友右衛門といふ者の屋敷を
拜領して其處に住居を占め後室若殿の御上と一